

No. 2477



教育ルネサンス

美術教育 2

知識重視より対話型鑑賞

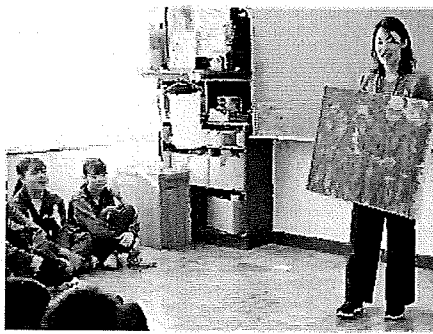
教育現場での美術作品の鑑賞が変わりつつある。技法の理解や美術史の知識習得だけでなく、作品をみて気付いた点を話し合い、論理的に考える力を育成する活動が注目されている。

1月末の朝、埼玉県所沢市立三ヶ島中学校で3年生のクラスを受け持つ佐藤彰弥教諭(35)が、人が並んで座る様子を描いた油絵を生徒たちに見せ、「何が見える?」と問いかけた。

「朝の電車の中」と答えた生徒に「どこからそう思うの?」と問いを重ねると、生徒は「人物の表情が暗く会社に行きたくなさそうだから」とその根拠を挙げた。

同中の「朝鑑賞」は、全クラスが毎週金曜日午前8時30

分から10分間、絵画を前に話し合う。学力テストの結果などから生徒の思考力や表現力に課題を感じていた沼田芳行校長(56)が、2016年から武蔵野美術大(東京)の協力を得て始めた。



「疲れて座っているみたい」。油絵を前に生徒たちは次々と発言していた(1月31日、埼玉県所沢市立三ヶ島中学校)

対話型の鑑賞に必要なのは、技法や美術史といった知識ではない。作品を注意深くみて考え、感じたことを言葉にし、他者の意見にも耳を傾ける姿勢という。

3年生の藤田夏輝さん(15)は、「朝鑑賞で話し合いに慣れているので、クラスのみんなも普段から積極的に意見を言える」と語る。「人と考え



三ヶ島中の朝鑑賞で使われた電車の中の風景を描いた油絵

が違つことを学べる。教員も生徒たちに物事を決めさせるなど主体性を認めるようになつた(沼田校長)

愛媛県美術館は、13年度に県内の小中高校を対象に対話型鑑賞をスタートし、今年度は約80の小学校で出前授業を行う。

学芸員の鈴木有紀さん(50)によると、新学習指導要領では、自ら考え、話し合いを通じた学びが重視されることから、学校現場で対話型鑑賞への関心が高まっている。

同美術館では15年度から4年間、県内の小中高校と協力して、対話型鑑賞の手法を国語、理科、体育など他教科でも使える指導法の開発にも取り組んできた。どの科目でも共通するのは、写真や映像などの視覚教材を観察させた後、意見交換や教諭による問いかけなどを組み合わせる点だ。展覧会や芸術祭などを企画

・運営する人材を育てる京都造形芸術大アートプロデュース学科では、04年から対話型鑑賞を1年生の必修科目にしている。

講義では、作品の鑑賞法や対話型鑑賞を進めるナビゲーター役のスキルを学ぶ。

作品の魅力を見いだす力やコミュニケーション力など、プロデューサーとして必要な能力を鍛えるためという。

同大の福のり子教授(鑑賞教育学)は、「美術教育は作品の制作に重きを置いて、見る人の育成が十分でなかった」と指摘する。

近年、対話型鑑賞は、企業の社員研修や社会人向け民間セミナーに取り入れられるなど、ビジネス界でも注目されている。

福教授は「変化の激しい先の見えない時代に、正解のない問いに挑む力が求められているのでしょ」としている。